

無量壽

平成24年1月1日
浄土真宗 本願寺派
林徳寺 発行
025 - 276 - 3456

浄土真宗物語 ⑱

江州堅田（滋賀県大津市堅田）に法住という方がおられました。祖父が親鸞聖人の教えに帰依し本願寺の弟子となっていました。その子である法住の父、覚念の代で禅宗に改宗していました。

法住が十六歳の頃流行病にかかりました。幸い回復しましたが、あるとき夢を見ました。墨染の衣を着た僧侶が二人現れ、仏壇を「汝つたなし、つたなし」と鳥の羽のようなもので払うと、ばらばらと虫が落ちてきたというのです。その当時、普通の家には仏壇はありませんでしたが、法住の家は禅宗の道場でしたから仏壇があったのです。

この話を母親に伝えると、「そのお二人は法然上人と親鸞聖人に間違いない。病気が治ったら必ず本願寺にお参りしなさい。」と法住に進

めました。

その進めもあって、病気が全快した後に本願寺を参拝しようとして京都に上った法住でしたが、いざ本願寺近くまで来てみようとその建物はあまりに小さく、参拝の人もほとんど見られません。それに比べて東山渋谷の仏光寺（真宗仏光寺派本山）は、広大な寺域を誇り参拝者も多く賑わっていたため、結局、法住は仏光寺の門徒となってしまいました。後に蓮如の弟子として欠かせない存在となり、堅田に本福寺を建立して本願寺の重要な護持者となった法住ですが、当時の本願寺は、その法住でさえも見捨てかねないような存在だったのです。



本福寺正面（平成13年3月10日撮影）

この堅田の法住が建立した本福寺は、平成十三年の「林徳寺・誠心会本山参拝旅行」で参拝しています。三井財閥の本家のお仏壇など、お宝を拝観させていた

だいたことが思い出されます。

法住が後に仏光寺を離れて本願寺の弟子になった頃、本願寺は第六代の巧如上人の時代でした。一緒にお住まいであった、後に第七代とされる存如上人には、すでに長男の蓮如上人がおられました。蓮如上人の母親は、第六代巧如上人の奥様の召使であったと言われています。ですから存如上人の正式な奥様ではありません。



鹿の子の御影

後日、存如上人が正式な奥様をもたれる際

に、母親は蓮如上人の六歳の肖像画を持って本願寺を出て行ったようです。その後の行方は全く不明です。

蓮如上人は後に、母親が持って行った肖像画の絵師を見つけ出し、全く同じ肖像画を描かせて大事に持つておられました。「鹿の子の御影」といわれるこの肖像画は、蓮如上人の娘さんが嫁がれた、福井県のお寺に伝えられています。

続く

親鸞聖人750回大遠忌法要

平成22・23年において、林徳寺・新潟組・本山で行われた「親鸞聖人大遠忌法要」の様子を紹介します。

①林徳寺「親鸞聖人750回大遠忌お待ち受け法要」

平成22年11月26日（金）、林徳寺本堂にて、法要を行いました。



法話

講師は藤井哲雄師
(住職の弟)



本願寺の「常灯明」を分けていただいた火から、蝋燭などに点火しました。



法要



参拝席

一緒に読経していただきました。

②新潟組「親鸞聖人750回大遠忌お待ち受け法要」

平成23年3月5日（土）、りゅーとびあ能楽堂にて、法要を行いました。

新潟組とは、新潟市の東部から村上市までの地域の、本願寺派寺院の集まりです。



法要



法要



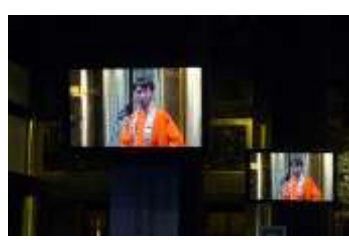
城谷小夜子「恵信尼様」

③本願寺「親鸞聖人750回大遠忌法要」

平成23年6月9日（木）、本山での法要に参拝しました。



お飾り（本山で50年に1回の大遠忌法要にのみ用いられるお飾りの方法です）



法要会場の本願寺「御影堂」は大変な広さのため、法要の場面は映像でしか見ることができませんでした。
(左：新門様、右：御門主様、新門様の連座)



林徳寺住職と長男（後継者）二人並んで参拝させてもらいました。

日本語になった仏教の言葉 ⑱

《法名》 ほうみょう

法名は中国・日本を通じてみられる

ように、仏教に帰依入信した者に授け

られた。従って、浄土真宗や日蓮宗な

どのように通例の戒の授受（受戒とい

う）を行わなくとも、法名（宗派によ

っては戒名）を授けているし、法名は

出家・在家の区別なく与えられた。

法名はもとより生前入信したとき

に与えられたが、在家の男女が死後、

僧から法名を与えられることが行わ

れるようになり、これをも法名（ある

いは戒名）とよんだ。近世の檀家制度

のもとでこの形が一般的になり、今で

は生前の俗名に対する死者の名前で

あると誤解されている面もある。

浄土真宗では、本山などで行われる

「帰敬式」（お剃刀とも言ふ）におい

て、本尊である阿弥陀仏の前で御門主

様からいただくのが本来の形である。

中国で道安（312～385）が、仏弟子

は釈尊（釈迦族の聖者の意味）の《釋》

を姓とすべきであるとして自らも釋

道安と名乗った。親鸞聖人もその伝統

に則り、釋親鸞と名乗られたことが、

浄土真宗の法名の起源である。

『岩波仏教辞典』などより